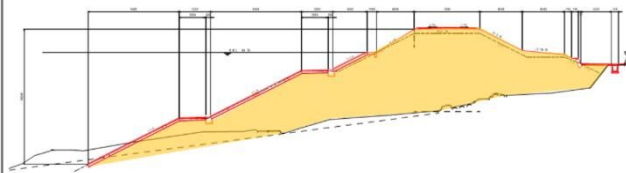
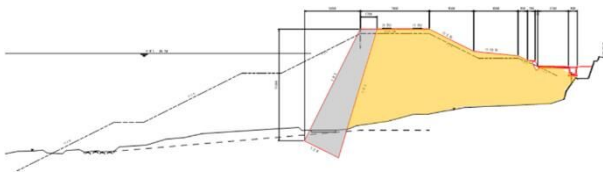
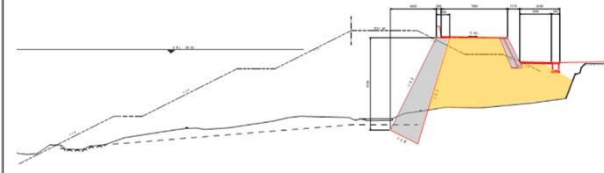


第2回 名勝木曽川の堤防整備に関する検討委員会

説明資料 <抜粋>

- 敷幅が異なる堤防の形状ごとに、露岩や水神・渡し跡、景観、住民生活への影響度を整理した。
- 標準的な堤防断面(例1)は、これらへの影響度が大きい反面、景観上は植生を期待できる。
- 土留擁壁の設置(例2・例3)により影響度は軽減されるが、川表に長大なコンクリート壁面が生じることとなる。
- 天端部に直壁を整備する場合(例3)は、その修景が困難と考えられる。

堤防形状の特性 比較表

	例1 標準的な横断面	例2 川表に土留擁壁を設置	例3 川表・川裏ともに土留擁壁を設置 (天端部へは直壁を設置)
概要	 ・ 標準的な法勾配2割の堤防を整備 ・ 川表にはコンクリート張護岸を整備 ・ 小段を無くし法勾配3割とすることも可能 ・ 護岸を覆土することも可能	 川表に法勾配5分のコンクリート土留擁壁を整備することにより、堤敷幅を狭めることが可能。	 (同左) ・ 土留擁壁を川裏へも整備し、天端部へは直壁を設けることにより、堤敷幅を例2よりも更に狭めることが可能
露岩	露岩の約64%が消滅する。	露岩の消滅割合は約15%となる。	露岩の消滅割合を約4%に抑えられる。
水神・渡し跡	・ 水神は移設が必要となる ・ 渡し跡への坂路の約2/3が消滅する	(同左) ・ 渡し跡への坂路が部分的に消滅する	・ 水神は川表擁壁基礎部の間近に位置する ・ 渡し跡への坂路への影響は無い
景観	覆土により植生が期待できる。	コンクリートがむき出しとなる。	(同左：特に直壁の修景が困難となる)
住民生活	・ 河畔との往来は階段の整備で確保できる ・ 近接家屋の居住者に圧迫感を与える可能性がある	(同左) (同左) ・ 堤防天端からの転落の防止対策を要する	(同左) ・ 圧迫感は左例よりも軽減方向となる ・ 直壁が転落防止対策ともなる

注) 擁壁は経済性の観点から無筋構造物とし、形式は以下の理由により「もたれ式」とした。

- ・ ブロック積・練石積：一法分の直高を経験則から5m以下としており、対象区間(直高10m程度)では幅4m程度の小段を設けて2段で整備する必要がある。小段へは出水後に流木等が残留し維持管理に適さない
- ・ 重力式：もたれ式と比べて幅をとるため露岩の消滅範囲が広がる。経済性でも劣る

露岩や水神・渡し跡との位置関係

- 堤防と露岩や水神、渡し跡との平面的な位置関係を整理した。

■ : 露岩 (H27確認範囲)
■ : 露岩 (R2. 7出水後の追加確認範囲)
■ : 近接家屋

現状



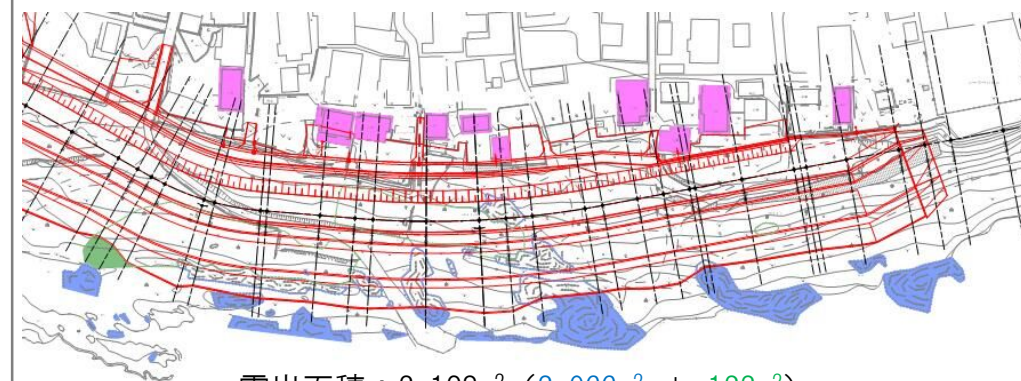
露岩面積 : 6,037m² (3,192m² + 2,845m²)

例2 川表に擁壁を設置



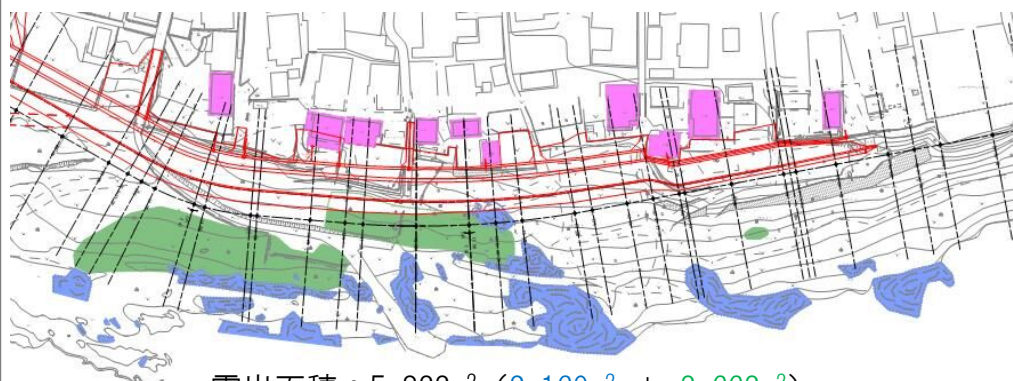
露岩面積 : 5,129m² (3,068m² + 2,061m²)
 残存割合 : 85.0% (98.0% · 72.4%)

例1 標準的な横断面



露岩面積 : 2,198m² (2,066m² + 132m²)
 残存割合 : 35.8% (64.7% · 4.6%)

例3 川表・川裏ともに擁壁を設置(天端へは直壁を設置)



露岩面積 : 5,822m² (3,160m² + 2,662m²)
 残存割合 : 96.4% (99.0% · 93.6%)